

## 福祉ボランティア体験記①

～ボランティアを通して見えてくるもの～

私は現在、福岡市の老人福祉施設で、書道のボランティアとして活動をしています。

かなり昔、亡くなった母の病氣療養中に、デイサービスを利用していたことがあってその頃はまだ、認知症と麻痺などの身体障害の比率は、後者のほうが多かったように思います。

今は軽度とはいえ、認知症の利用者さんの割合がとても多いですね。

それはボランティアとして現場に入ってから気づいたことです。

それで、まず顔を覚えてもらうために、毎回「制服」のように、同じ服装で通うことにしました。

繰り返し記憶というものは認知症の方でも比較的定着しやすいためです。

しかし、本格的に書道の活動をしていくにつれ、とても戸惑うこともありました。

お手本を用意していますので、通常はお手本を見て半紙にその通りに書く。

例えば太い筆でかかれたものは、迷わず太い筆を選んで書く。

利用者の皆さんも、通常そうするものだ、と思っていましたが、違いました。

皆さん真剣にやっておられるのですが、はたからみれば「自分勝手」に書いているようにみえるのです。会話など問題ないので、余計に戸惑いました。

それで調べてみると、やはり

**軽度の認知症で「書字障害」の症状がところどころで現れていることが分かりました。**

それを知ってからはいたづらに「こうしてほしい」のではなく、「気持ちよく書道を楽しんでもらうにはどうしてほしいのか」という要望を軸にして活動を組み立てることにしてからは、戸惑いも自然になくなりました。

そして、たとえ戸惑うことがあっても、病気の正しい知識を学べば自然と解決したり、ストレスも軽減するということを身をもって学びました。

また、利用者さんは高齢の方が多く、いつ来られなくなっても不思議ではありません。

スタッフの皆さんは忙しく一期一会という感覚も希薄になるとは思いますが、亡くなられるときに、「よく覚えてはいないけど、あのとき、たのしかったな」と思われるようにする努力も必要だと感じています。

また日が浅いスタッフのみなさんは、なにがなんだか分からないと思います。

そんなときは

- ・手があいているのなら「利用者さんのお見送り」をして、顔を覚えてもらう事。
- ・また積極的に利用者さんと「会話」すること。
- ・知らないことをふられたら「わかりません」ではなく「しりませんでした。ぜひ教えてください」と、話をつなげば喜んで教えてくれるはずです。

私も時間があれば「ボランティア」として雑談を楽しんで見守りの手伝いをしています。大変かと思いますが、自分の工夫次第で「福祉のプロ」としてやりがいのある仕事だと思いますので、頑張ってくださいと思います。